

2021年
11月8日
月曜日

「偶然性は不可能性が可能性へ接する切点である。偶然性の中に極微の可能性を把握し、未来的な可能性をはくむことによって行為の曲線を展開し、翻って現在のなる偶然性の生産の意味を倒逆的に理解することが出来る。「目的なき目的」を未来の生産に醸して邂逅の「瞬間」に驚異を齎らすことが出来る。そうして、一切の偶然性の驚異を未来によって強調することは「偶然―必然」の相関を成立させることであつて、また従つて偶然性をして真に偶然性たらしめることである。これが有限なる実存者に与えられた課題であり、同時にまた、実存する有限者の救いでなければならぬ。」

九鬼周造

直接的に出会うことが憚られる世界になつて2年ほどが過ぎたように思う。飲み会や旅行、気軽に楽しめ

栗田 匡相 教授（開発経済学）

遇ひて空しく過ぐる勿れ

ていた直接的なふれあいが制限されている。肌のおれあいは悪しきものとして排除される。我々の生活から人間的な営みが根こそぎ取り除かれている。だからこそ直接的な出会いを取り戻さなければならぬし、近く訪れる厄災の過ぎ去つた頃には我々はまた人間的な生活に戻れるに違いない。そんな風に我々は未来に希望を託している。

でも、待つて欲しい。そもそも厄災前の世界においてですら、我々は世界と他者と正しく出会えていたのだろうか。この厄災は、世界というものとは如何様にも変わりうるものでもあるということを我々の目の前に突きつけた。そもそも我々は油断していたのではないか。だからこそ、まずは世界に出会うための方法や意味が、未来に希望を託す前に問われなければならないのではないか。「悔いの無い人生を送りたいから

いつ死んでもいいように今やりたいことをやって生きていく」、というなんとも思い切りのよい言説が好き。な若者も多いようだ。でも「悔いの無い人生」という未だ訪れていない未来に投げかけた無責任な幻想に縛られて、「今やりたいこと」の呪縛に身動きが取れなくなり、目の前に広がる如何様にも変わりうる世界、自らの人生の可能性に気づいていない残念な学生は残念ながら一定数存在する。一方で、確率的な言説に一喜一憂しつつ、20年後も大丈夫な就職先はどこなのか、といった浮世の戯れに心を砕き過ぎている若者もいるだろう。両極端過ぎる生き方のように思えるが、どちらも世界に出会えていないという点において大差は無い。

厄災の最中においても、学生達の生き活きとした笑顔に出会うこともある。彼らに共通していることは、

希少になつてしまつた直接的な出会いを丁寧に自分の人生に織り込んでいくことだ。世界は不意に変わつてしまふのだという現実を突きつけられても、自分の無力さを痛感させられても、これまでの出会いや他者と共に刻んだ歩みをしっかりと受け止めようとしている彼らに焦りや苛立ちの色は見られない。ただ多くの出会いが築き上げてくれた自らの人生を、運命を、他者の存在と共に驚きを持って受け入れることに注力している。

だから無責任な未来の幻想に酔つてはいけぬし、浮世の戯れに心を病んでもいけない。そこに世界は無く、他者はいない。今あなたが遇つている現実に対して空しく過ごすのはやめた方がよいのだ。我々が厄災の悲劇から真に学ばなければならぬこととはそういうことだ。